天台と三論の交渉

——智顛説・灌頂録『金光明經文句』と

吉蔵撰『金光明經疏』との比較を通じて——

藤 井 教 公

一 問題の所在

近年、天台と三論の両宗について、それぞれに現存する經典注釈書類を中心とした著作の比較検討を通じての研究が進められ、その結果、それぞれの注釈文献成立の上で、三論・天台の兩者の間に密接な関係があることが明らかにされた。すなわち、天台の智顛と三論の吉蔵の兩者に共通して存在する經典注釈書類に關し、年代的に先行するはずの智顛の注釈書類が吉蔵のものを多く引用・援用しており、その逆の場合には非常に少いということが指摘されている。

このことは、天台の側にとっては、その著作の内容であり、これまで智顛の教學思想とされてきたそのものについて、どこまでが灌頂の付加なのか、そして灌頂が吉蔵に拠ることが多い以上、三論吉蔵の影響がどこまで及んでいるの

か、という重大な問題を投げかけるものである。

そこで本論では、如上の問題に近づく一步として、智顛と吉蔵の兩者に共通して存在する『金光明經』の注釈書を取りあげて、兩者を比較検討することによって、天台・三論の文献的交渉について示したい。

二 智顛と吉蔵の『金光明經』注釈書類

『金光明經』は鎮護國家と現世利益信仰を説いた經典で、中國で広く流布し、曇無讖訳を初伝、真諦三蔵訳を次伝として唐の義浄訳までに都合五本の異訳がある。

天台智顛のこの經に対する注釈書類では、『金光明經玄義』二卷（以下『玄義』と略）及び『金光明經文句』六卷（以下『文句』の二つがあり、いずれも智者大師説・門人灌頂録というものである。『玄義』は、注釈書ではなく、一經の玄旨を述

べたものであるが、後に宋代にこの書に広略二本があらわれ（広本の方に帝王釈、観心釈がある）、広本の真偽をめぐって山家・山外の四十年に亘る論争がおこなわれることになった書である。いま一つの『文句』は、曇無讖訳四卷十八品に対する注釈書で、随処に真諦訳について触れている。

この天台智嶺の二書については、先に佐藤哲英博士の論究があり、今はそれを踏まえて検討をすすめるが、佐藤博士は、この二書の成立時期はほぼ同時で、『文句』中に『法華玄義』や『摩訶止観』に説明を譲っている箇処があり、また、灌頂の『智者大師別伝』に疏の名がないことから、六〇五—六三二（灌頂入教）年の間の成立とされている。この二書には、真諦三蔵の疏（十三卷。現存せず）が引かれることが多く、その真諦三蔵の説を破斥して自説を展開することがしばしばである。また、天台師、今師、大師云く、などという表現が見られ、佐藤博士は、この点から、この二書は灌頂が真諦疏を参照しつつ、かなり智嶺の講説部分に手を入れたもので、むしろ灌頂の撰述とした方が良いとされている（それ故、本論では、以後、智嶺と灌頂の両者を含めたい方として、単に天台と呼ぶことにする）。

一方、吉蔵の經に対する著作としては、『金光明經疏』一卷（以下『疏』と略）がある。この『疏』は小部のもので、内容も極めて簡潔で、智嶺と同様、曇無讖訳に対する注釈書で

ある。その成立時期は明らかでないが、『疏』中で、会稽嘉祥寺時代（五八九—五九七）に成ったとされる『涅槃經疏』にその説明を譲っているところがあるので、それ以後の成立であることは間違いなく、またその『涅槃經疏』は、後年成立の『涅槃經遊意』の冒頭で吉蔵自ら、早くに散佚したと述べているから、『疏』成立の下限は『涅槃經遊意』の成立以前のことであろうと推測される。

吉蔵のこの『疏』の内容は、簡潔な經の随文解釈で、『勝鬘寶窟』に典型的に見られるような多くの經の引用、他の諸師の説の紹介などはほとんど見られない。しかし、注目すべきは、天台と同じく真諦の七卷本（吉蔵もこれを新本と呼んでいる）についていくどか触れていることであり、天台の場合と同様に真諦訳を見ていたことが知られる。真諦の疏については、吉蔵は『疏』中で、真諦曰く、などとして直接に真諦を指示する引用は一つもない。真諦の名を出さないということは、吉蔵が真諦疏を見なかったということでは決してなく、事實はむしろその逆である。後に出すように、吉蔵が自らの『疏』の中に、真諦の名を挙げずにその解釈を紹介している例、また、真諦の説を採り込んで自説として述べている例をいくつか指摘することができた。このことから吉蔵が真諦疏を見ていたことは明白である。今日、真諦疏は現存しないから、吉蔵の『疏』が、その成立をどの程度まで真諦疏に

負っているかはこれを知ることができないが、その依存度はかなり高いものではなかったか。真諦疏への依存度が高ければこそ、吉蔵はあえて真諦の名を挙げなかったのではないかと推測されるのである。

三 天台『金光明経文句』と

吉蔵『金光明経疏』との比較

天台の『文句』と吉蔵の『疏』の両者を比較対照して、その表現及び経に対する解釈の同異を検討してみよう。

まず、経の分科についてみると、『文句』では、江北諸師、江南諸師、それに真諦の説を紹介し、後に自らの分科を出している。

江北諸師以初品為序。寿量下訖捨身為正。讚仏為流通。正文又三。寿量下是正説。四王下大誓護經。除病下大悲接物。江南諸師以初品為序。寿量下為正。四王下十三品為流通。真諦三藏分新文二十二品。初品為序。寿量下至捨身二十九品為正。後兩品為流通。真諦積云。寿量明師果懺。歎兩品明弟子因。授記是弟子果。除病是師因。四王下正論力用。前師果弟因既為正。後師弟因果何得為流通耶。（中略）今從如是我聞入壽量、訖天龍集信相菩薩室、為序段。從爾時四仏下、訖空品、正説段。從四王品下訖經流通段。（序品、大正藏三九卷・四六b-c、以下、卷教略。傍点筆者、以下同）

これによると、天台の分科は、江南諸師の、序品を序分、第二寿量品から第五空品までを正説分、第六四天王品以下十三品を流通分とする説に類似していることが知られるが、天台の場合は序分が第二寿量品の後半までかかっているのが相違する点である。さらに正説分についてみると、寿量品の積中で、真諦三蔵の説を含めた三説を示し、真諦の、寿量品を果段、三身分別品を因段する説を「師云。三身成二果上義、非因義。是故不用」（五七b）として斥けて、続けて、第一の説の、寿量品は常住の果を明かすので、これを宗・体とし、懺悔品以空品までを経の力用を明かすものとする説について、「初家所説、好与今意同」（同前）として、これを支持している。すなわち、正説分について天台は寿量品を経の体、懺悔品以下空品までを経の力用を顯わすものとしている。

それでは、吉蔵の分科はどうであろうか。『疏』では、経題の「金光明」の積の後に経の分科を出しているが、それによれば、

此四卷中大判有三段。第一序品即是序説分。第二從壽量品、訖捨身品、是正説分。第三讚仏一品是流通説也。（大正藏三九卷、一六〇b、以下、卷教略）

とあり、序品を序分、寿量品より第十七捨身品までを正説分、最後の第十八讚仏品を流通分としている。そして、その正説分については、

第二正説中有二。第二從_レ壽量_レ訖_レ空品_レ明_レ常住因果。即是經體。第二從_レ四天王品_レ訖_レ捨身品_レ明_レ歎_レ經勸_レ學。即經力用。(二六一)

c)

と述べて、壽量品から空品まで、すなわち天台が正説分とした部分を經の體とし、それ以下の四天王品から捨身品までを經の力用としている。この吉藏の分科は、先に『文句』が紹介した江北諸師と真諦の分科と類同のものであり、天台の分科と大きく相違している。

次に、内容についてみると、まず、經題の「金光明」の三字の解釈では、吉藏は『疏』の初めにその解釈を示しているが、天台では『文句』にはそれは見られず、『玄義』の「釈題」中の釈名段に詳説されている。そこでは真諦の解釈を挙げ、一々それに反駁を加えた後に自説を出している。今、兩者を対照すると、

『疏』

金光明經者、乃是究竟大乘菩薩藏。是頓教所_レ収。論_レ其宗極、

- 表三種三法。一表三身仏果。二表涅槃三德。三表三種仏性。
- 表三身者、金体真實譬。法身仏。光用能照譬。応身仏。明能遍益猶如化身。第二譬三德者、以金体四義一譬。法身四德。色無_レ變如_レ常。体無_レ染如_レ淨。転

『玄義』

真諦三藏云、三字譬三種三法。一譬三身。二譬三德。三譬三身位。譬三身者、金体真實以譬法身。光用能照以譬。応身。明能遍益以譬。化身。次譬三德者、金有四義。一色無_レ變。二体無_レ染。三転作無礙。四令人富。金

一作無礙如_レ我。令人富貴如_レ樂也。次光有二義。能照。能除如_レ般若。次明有二義。無闇。広遠如_レ解脫。総無_レ衆患。第三表三種仏性者、金体本有如_レ道前正因。光用始有如_レ道内了因。明は無闇如_レ道後至果。以_レ金等三義一譬三種三法。故言_レ金光明經也。(一六〇b)

以譬_レ法身常染我淨四德。光有二義。一能照了。二能除闇。以譬_レ般若照境除_レ惑。明有二義。一無闇。二広遠。以譬_レ解脫衆累永尽淨益有_レ縁。次三位者、金性先有、如_レ道前正因位。光融体顯、如_レ道中了_レ因位。明無_レ瑕垢、如_レ道後縁_レ因位。(中略)大師謂、三三之積、三義不了。一因果不通。二乖_レ円別。三不_レ称_レ法性。(二a)

となる。右の対照は、『玄義』は真諦説を挙げ、それに対し三点から批判を加える部分であるが、兩者比較して一見して知られることは、吉藏の『疏』の積は、真諦の積と字句と表現は一部変えてはいるというものの、殆んど同一であるということである。吉藏は「金光明」の三字は、三身仏果、涅槃三德、三種仏性という三種の三法を表わしたものであるが、これは全く真諦説そのもので、その後の積も内容表現とも真諦説のひきうつしといつてよい。吉藏が真諦積をその名を出さずそのまま採りこんで自説としていることは明白である。天台の場合には、先に挙げた部分に続いて、真諦積をかなり長文にわたって破斥した後、自らは、

且寄_レ十種三法_レ以為_レ初門。復為_レ三意。二標_レ十數。二積_レ十相。三簡_レ十法。言_レ標_レ十數_レ者、謂_レ三德・三寶・三涅槃・三身・三大乘

・三菩提・三般若・三仏性・三識・三道也。(二b~c) といつて、十種三法を挙げ、「金光明」の三字は十種の三法を譬えるものであるとする。以上から、吉蔵は真諦説をそのまま承け、天台は『玄義』において真諦説を出してこれを破斥して自らの十種三法の解釈を示しており、両者の間に大きな解釈上の相違が見られるのである。

次に寿量品における同様の例を示そう。経の、信相菩薩が仏の八十才の年について疑念をもつ部分の釈である。天台は、先と同様に『玄義』において真諦釈を出し、これを破斥した後に自説を述べている。これを吉蔵の『疏』の釈と対照してみると、次のようである。

『疏』

問曰。此経は何時説疑。仏八十。釈曰。未涅槃前九十日説。所以知。然從如来出世。至於法華。未涅槃之語。説法華已後。告於魔王。唱言。却後三月涅槃。此時衆生方知八十年。以此可知。於九十日説。而九十日内。未知是何日説。方者將也。二月十五日入八十二而未滿。足一曰將。(一六二a)

『玄義』

真諦三蔵云。此経は法華之後、涅槃之前九十日説。引涅槃云、仏告波旬、却後三月吾當涅槃。信相聞斯。故知八十心滅。是義亦不然。(中略)如此對酌五味、明義。則第三生酥撰。若四蔵明義、則雜蔵撰。四教明義、則通教撰。通教之中即得論帶別明。円也。(二a)

右に見るように吉蔵は、ここでは経の説時を涅槃の前の九十日(三ヶ月)の説として、また先にはこの経について、挙

げた「金光明」の釈の引文中で「究竟大乘菩薩撰」「頓教所収」といっており、経に高い地位を与えている。ところで、この「涅槃の前の九十日の説」というのは、『玄義』に引かれた真諦説と同じで、表現は変えてはいはいるものの、明らかに真諦説をそのまま承けたものであることが知られる。一方、天台の場合は真諦説を「是義亦不然」として否定し、経について五時判でいえば第三方等時、四教では通教に属して別を帯びて円を明らかにすもの、と規定している。それ故、ここでも吉蔵の解釈と大きな違いを見せている。

さて、次には、天台と吉蔵の釈の内容が同一のものを示そう。それは、除病品の釈で、吉蔵の『疏』では、「解有二師」として挙げるうちの一つで、天台の『文句』では地の文となつているものである。

『疏』

又言、正月二日正是春時、木於中王。土寄三月撰属春時。四月五月正是夏時。火於中王。土寄六月撰属夏時。七月八月正是秋時。金於中王。土寄九月撰属秋時。十月十一月正是冬時。水於中王。土寄臘月撰属冬時。土寄四季以正時為本。各各三月並撰於中土。故言三三本撰。此是主撰。客是土也。(一七二a)

『文句』

又云。正月二日正是春時、木於中王。土寄三月撰属春時。四月五月正是夏時。火於中王。土寄六月撰属夏時。七月八月正是秋時。金於中王。土寄九月撰属秋時。十月十一月正是冬時。水於中王。土寄臘月撰属冬時。土寄四季正時為本。各各三月並撰於土。故言三三本撰。主撰於客。客是土也。(八二b)

右の対照表で明らかのように、両者の積はわずかに数字の違いしかなく、全同であるといつてよい。この積の部分は、経が一年を三ヶ月と二ヶ月にそれぞれ区切って数える暦の積である。今、挙げた部分の後ろにも暦の積でほとんど両者同一内容のものがあるが(『疏』一七二b、『文句』八〇c)、この両者の一致は、どちらかがどちらかの積を引いたというのではなく、同一のソース(すなわち真諦疏)から両者それぞれ採ったものであろう。それは、やはり、この除病品の後の積で、経が一年の季節ごとに発する病いを説いた部分があるが、『文句』と『疏』のその部分に対する積はほぼ全同である(『疏』一七二c、『文句』八一c)。両者とも引用でなく、地の文として出しているが、ところが『文句』のその部分の積の末尾に「此中消文、出真諦三藏疏中」とあって、『文句』が真諦疏に拠ったことを明示している。これによつて『文句』が真諦疏を承けていることが知られ、同時に『疏』も、また真諦疏に拠っていることが知られるのである。

四 小 結

以上、天台と三論吉蔵の両者に共通に存する『金光明経』の疏についてこれに検討を加えてきた。その結果、天台の『文句』(及び『玄義』)と吉蔵の『疏』とは、両者とも真諦疏を見ており、随時それを引用・援用していることがわかつ

た。その引用・援用の形態としては、天台の場合は「真諦云」としてその名を出すが多いが、吉蔵の場合は一切その名を出さず、真諦疏をそのまま自説としてとりこんでいる例が目立った。また、天台の場合は、真諦疏を引く際には排斥の対象として引き、その後自説を展開していることが多い。それ故、両者とも真諦疏という同一のものに拠りながら、その両者の解釈はかなり違ったものとなっている。例には示し得なかったが、『文句』では、寿量品において、五戒、十善、止善、行善などを、懺悔品においては懺悔について詳説し、讚歎品、正論品、善集品においては四悉檀によつて解をなしており、経に対する実践的側面からの把握がなされておき、この点もまた、吉蔵の『疏』との大きな違いとなっている。以上のことから推して、天台と三論吉蔵における文献の交渉は、『金光明経』の注釈書類に関するかぎり、両者の間に存在しないといつてもよいであらう。それは、これまでに指摘されている『法華文句』や『維摩経疏』など一連の灌頂修治の著作とは大いに異なるものである。

△キーワード▽ 『金光明経疏』、『金光明経玄義』、『金光明経文句』、吉蔵、智顛。

(横浜市立大学講師)